

タイトル	幸堂得知「浦島次郎蓬萊嘶」・覚書
著者	林，晃平； HAYASHI，Kouhei
引用	北海学園大学人文論集(72)： 154(四三)-139(五八)
発行日	2022-03-31

幸堂得知『浦島次郎蓬萊噺』・覚書

林 晃平

今日、幸堂得知の名前をもつ明治の文学者を知っている人は多くない。また、文学史の中で触れられることも稀である。それは明治維新を迎えても、西欧文化に背を向けて、それまでの江戸文化の中で文学と文化の批評を続けていた文学者であつたからであろう。一方、それゆえに得知は劇評家としても、それなりの評価は受けているようである。そうした得知の姿勢を「江戸趣味」という呼び方で一括りにして、その存在意義を無にしようのは決してよいとはいえないであろう。^{注一〇}

ここでは彼の目指していたものを、『浦島次郎蓬萊噺』という浦島伝説を素材とした作品を取り上げることで、その周辺にあるものとの位置づけ、作品の系譜など複数の視点から焦点を当てて見直してみたい。筆者はかつて本作品を紹介し、この作品が浦島伝説の流れの中では、幸田露伴「新浦島」へと繋がるものであることを述べた。^{注一一}本稿では作品の周辺の事情を取り上げることによって、明治文化と近代に背を向けていたのではなく、あえてそれに対抗していたのであることを、彼の文学とその周辺の事情から明らかにしたい。

明治二十四年という年

得知は、明治二年（一八六九）、三井両替店の店員となり、仕事ぶりを見込まれて大番頭鈴木利平の養子となり、同九年、養父死亡とともに襲名する。生年を天保十四年（一八四三）という説に従えば二十六歳頃のことである。^{注〇三}そして、同年、三井両替店改組にともない三井銀行員となり、その後、京都、青森の支店長を歴任していく。つまり鈴木利平は、近代経済においてその仕組みの中で生きてきた有能な経済人であった。しかし、同二十一年、四十六歳で退職する。^{注〇四}銀行員時代からしばしば「読売新聞」などに劇評や戯文を寄せているので、経済活動とは別に、志向は江戸時代に向いていたのである。ゆえに明治二十一年七月「東京朝日新聞」が発刊されると、幸堂得知の筆名で滑稽読物を連載しはじめ、二十四年一月正式入社、小説担当となる。『浦島次郎蓬萊噺』が刊行されたのはまさにその二十四年であった。

この作品は、前年から刊行されていた「新作拾二番」の第八番目に刊行されたもので、尾崎紅葉・山田美妙・饗庭篁村・依田学海など「現今小説家の巨擘を以て目せらる、」作家の新作傑作集であり、半紙に木版摺り、彩色表紙、口絵入りの美本。画は月岡芳年や渡辺省亭らが担当していた。^{注〇五}既に得知は小説家としての十分な地位を得た上での、期待された新作であったのだ。

ちようどこの前後の文化状況についても一つ追加しておこう。高橋寿美子氏は次のように記している。

明治二十二年四月、旧幕臣や旧水戸藩士を中心として江戸会が発足し、六月には、江戸期の政治制度・文学・風俗・美術などを記録しようとする機関紙『江戸会雑誌』が創刊された。同誌は、八月に『江戸会誌』に改題されたが、改題第一号には饗庭篁村が「祝辞」を寄せている。さらに、二十二年五月、『絵入朝野新聞』が『江戸新聞』に改題され、その第一号には篁村と須藤南翠とが改題を祝う文を寄せている。また、明治二十三年六月、硯友社の機関紙『江戸むらさき』が創刊されたが、同誌は篁村・宮崎三昧・幸田露伴が社友であった。こうした江戸復興の諸

潮流と根岸党との関りについては、これまで問題にされてこなかったが、根岸党は東京（江戸）出身者、もしくは明治政府に反感を持つと思われる人物で構成されていたのだ。

もちろん得知も根岸党の一人であり、最年長者であった。高橋はこうした動きから「明治二十年前後、江戸文学を見直し、その一面を取り入れつつ新しい文学をつくらうという機運が高まり、それが二十年代、三十年代にかけて江戸文学の大流行に繋がったのである」ととらえているのである。^{注〇六}

御伽草子「浦島太郎」

幸堂得知の作品『浦島次郎蓬萊嘶』の意義については二つの観点から見必要がある。一つは、ここで引用されている「浦島太郎」が、室町時代から江戸時代前期かけて展開していった所謂御伽草子の作物であるだけでなく、版本として広く流布していた「御伽文庫」（あるいは「祝言御伽文庫」という叢書の中の一冊として定着し、江戸後期まで版を重ねているものであること。^{注〇七}それを踏まえて、そこから話を始めていくという得知の手法は、江戸時代における浦島伝説一つの帰結を示していることである。

一方、浦島太郎の話は、「蓑亀」という異形の亀の出現により、元禄頃に龍宮への渡航の方法を、船から亀に乗り換えている。^{注〇八}これによって、伝説は江戸中期には乗亀譚を取り込んで、新たな展開を起こし、多くの浦島物の草双紙を生み出していくのであるが、得知はそれらには触れることはない。

そして、もう一つ、江戸後期においては、浦島太郎に隣接して新たな異郷訪問譚が起きていることである。これは、黒船来航（一八五三年）により一層現実味を帯びていく。それは、浦島伝説を下敷きにして、異郷訪問譚の展開の片翼を担うことである。江戸時代における浦島伝説の定着と新たな展開、つまり、版本としての御伽文庫「浦島太郎」及び乗

亀譚の成立後の一群の草双紙の創出により、新たな浦島伝説が江戸時代には起きてきているのである。そうした状況の中で、得知は、なぜ御伽文庫を底本としてこの話を展開したのか。江戸文学に詳しい得知であることを考慮するならば、乗亀譚という新展開の直前に話を戻して、あえてそこから始めたと言えるべきであろう。ゆえにこの話は江戸前期と幕末を対比させることで進んでいくのである。

ではその種本とすべき流布本の御伽文庫本をどこまで取り入れているのか。本文を参照して見れば一目瞭然に、ほとんどそっくりそのまま取り入れているのである。そもそもその手法は、山獺師の主人公に、「浦島太郎」という本を読ませるということで、浦島の話なぞるのである。ゆえに読者も同じ体験をすることになる。ここで、読者と主人公の視点も同じとなる。

小説の登場人物の紹介から、冒頭は以下のように始まる。

「従是／篠やま」

むかしく、丹波の國篠山の邊に、獺師の次郎作といふ者ありけり。此者親もなく妻子もなけれど、去とて鳥獸の腹に宿たるにも非ず、木に實たるには猶あらず、全く五倫五躰備はりたる人の子には相違なし。次郎作はか、荒くれたる業はひに世を送るものには似もやらず、生來讀書を好みて、或時は壁に對ひて一ト理屈位は並べるが、遂に一度閉口した事のないのが自慢で、人にも知られし男なり。今日も何方から借て來たやら、一冊の御伽雙紙を持帰り、晚餐の後、茅萱の園を引寄せ、煤氣た瓦燈へ灯火を點じ、囲爐裏の端へ匍匐になり、頓て彼双紙を開け余念もなしに讀出しける。」(一丁表)

そして、その「御伽文庫」本文が小説の中で具体的にどう使われているのかを、冒頭部とその次、そして末尾の三箇

所を取り上げて順に見ていこう。読みやすいように原文に若干の手を加えている。先ずは冒頭部である。

御伽文庫 むかしたんごの國にうらしまといふもの侍しに その子にうらしま太郎と申て としのよはひ二十四五のおのこ有けり あけくれうみのうろくづをととりて ちゝはゝをやしなひけるが 有日のつれ／＼につりをせんとて出にけり うら／＼しま／＼入江／＼いたらぬ所もなくつりをしをひろひみるめをかりなどしける所に ゑしまがいそといふ所にてかめをひとつり上げる うらしま太郎此かめにいふやう なんぢしやう有ものゝ中にもつるは千ねんかめは万年とていのちひさしきものなり たちまちこゝにていのちをたゝん事いたはしければたすくるなり つねには此おんを思ひいだすべしとて 此かめをもとのうみにかへしける〔第一図〕かくてうらしま太郎其日はくれて歸りぬ

蓬萊嘶 むかし 昔、たんごのこくよさこほりみつのえ 丹後國與謝郡水江の浦に浦島といふ者侍しに、そのこ 其子に太郎と申て、とし 年の齡二十四五の男有けり。あけくれうみ 明暮海の鱗族をとつて、ちゝはゝ 父母を養ひけるが、ある 有日のつれ／＼に、つり 釣をせんとて出けるに、えじま 江島が磯といふ所にて、ひとつ 一個の龜を釣上げる。太郎此龜にいふやう。なんぢしやう 汝生あるものゝ中にも、鶴は千年、龜は万年とて、命久しきものなり。たちまち 忽ち爰にて命を断ん事、いたは 勞しければ、助るなりとて、此龜を元の海へ放し、暮に及びて、わがすみか 我住家へ歸りぬ。

御伽文庫の本文は原文のまま示すが、読解の便を考慮し意味や文の句切れには一字空けとした。本文中の傍線部は煩雑ゆえに省略されたかと思われる箇所である。また、蓬萊嘶本文は振り仮名等も原文のままであるが、読解の便を考え適宜句読点を施した。本文中の太字（ゴシック体）は独自の改変と思われる部分を示す。こうして対比させてみると、御伽文庫の本文の一部に漢字を当て読みやすくしている以外はほとんど本文の改変をしていないことがわかる。

しかし、これに続く部分には若干の異同がみられる。

(四八)

御伽文庫 又つぐの 日うらのかたへ出てつりをせんと思ひみければ 是るかのかいしやうに小船一そううかへり あやしみやすらひみれば うつくしき女ばう只ひとり なみにゆられてしだひに太郎がたちたる所へつきにけり うらしま太郎が申けるは 御身いかなる人にてましましては かゝるおそろしき海上にたゞ一人のりて御入り候やらんと申ければ 女ばういひけるは さればさるかたへびんせん申て候へば おりふしなみかぜあらくして 人あまたうみの中へはね入られしを 心ある人有て 身づからをば此はし舟にのせてはなされけり かなしくおもひおにのしまへやゆかんとゆきかたしらぬおりふし たゞいま人にあひまいらせさふらふ 此世ならぬ御縁にてこそ候へされば とらおほかめも人をえんとこそしきふらへ とてさめざめとなきにけり うらしま太郎もさすかいは木にあらざれば あはれとおもひつなをとりてひきよせにけり〔第二回〕さて女ばう申けるは あはれわれらをほんごくへをくらせ給ひてたび候へかしこれにてすてられまいらせば わらははいづくへ何となりさふらふべき すて給ひ候、かいしやうにてのもの思ひもおなじ事にてこそ候はめ とかきくときさめくとなきければ うらしま太郎もあはれと思ひ おなじふねにのりおきのかたへこぎ出す かの女ばうのをしへにしたがひて はるか十日あまりのふなちを送りふるさとへぞつきにける さてふねよりあがりいか成所やらんと思へば しろかねのついちをつきてこがねのいらかをならべ門をたて いかならんてんじやうのすまゐもこれにはいかでまざるべき 此女ばうのすみ所 ことばにもおよばれず中へ申もをろかなり

蓬萊噺 又次の日も浦の方へ出て、釣をせんと思ひけるに、遙かの海上に小舟一艘浮べり。怪みてよくく見れば、美しい女房の只一人浪にゆられて、次第に太郎が立たる所へ着にけり。太郎申へ二丁・裏へ申けるは、御身いかなる人にてましましては、怖しき海上に御入り候ぞやと申けるに、女房さめくと泣いて、されば去る方へ便船

申て候に折ふし波風荒くして人許多海の中へ列入られしを、心ある人の情にて自らを此端舟に載て放されけり
とて、^{また}涙にむせびければ、太郎も傾岩木にあらねば哀れを催しと綱をとつて引寄る。

女房は泣々に、情あらば自らを本國へ送里たまひかし。是にて捨られ參らすれば何國へ何と成候べきとのたまへば、太郎も哀れと思ひ同じ舟に乗り沖の方へ漕出す。彼女房の教に随ひ十日あまりの船路を送り故郷へぞ着にける。楮舟より上りいかなる所やらんと見てあれば白銀の築地をつきて黄金の甕を並べ、いかならん天上の住居もいかで是には勝（二丁・表）るべきとこそ思はれたり。

ここでは大幅な削除が見られるが、内容の改変に及ぶものではなく、表現の簡略化を旨としたものであろう。最後に末尾部分である。

御伽文庫 扱うらしまはつるになりてこくうにとびのぼりける そもく此うらしまが年をかめがはからひとして
はこの中にたゝみ入にけり さてこそ七百年のよはひをたもちける あけてみるなど有しをあけにけるこそよしな
けれ

きみにあふよはうらしまが玉手はこあけてくやしきわかなみたかな

と哥にもよまれてこそ候へ

しやう有物いづれもなさけをしらぬといふことなし いはんや人けんの身としておんをみておんを知ぬは木石に
たとへたり 情ふかきふうふは二世のちきりと申が寔有がたき事共かな うらしまは鶴になりほうらいのやまにあ
ひをなす 「第八回」かめはこうに三せきのいわぬをそなへ万代をへしと也 扱こそめてたき様にもつるかめをこ
そ申候へ 只人には情あれ 情の有人は行末めて度由申傳たり 其のちうら嶋太郎は丹後のくににうら嶋の明神と

顯れ衆生さいどし給へり かめもおなし所に神とあらはれふうふの明神となり給ふ めてたかりけるためしなり

蓬萊嶸 偕浦島は鶴になりて虚空に昇りける。抑此浦島が年を亀が計(五丁・表)ひとして匣の中に疊み入にける。扱こそ七百年の齡を保ちたるなれ 明けて見るなと有しを、明にけるこそよしなけれ。

きみにあふよは浦嶋が玉手ばこ／あけてくやしき我なみだかな

と哥にも詠れてこそ候へ。生あるものいづれも情を知らぬといふ事なし。謂んや人間の身として恩を見て恩を知らぬは木石に譬へたり。情深き夫婦は二世の契と申が誠に有難き事どもかな。浦島は鶴になり、蓬萊の山に舞ひ、龜は甲に三石の祝ひを備へ万代を経しとなり。扱こそ愛度例にも鶴龜をこそ申候へ。只人には情ある人は行末愛度由申傳へたり。其後浦島太郎は丹後の国に浦島の明神と顯れ、衆生済度した(五丁・裏)まへり。龜も同じ所に神とあらはれ夫婦の明神と成たまふ。めでたかりける例なり。

かくのごとく本を読むという形で内容紹介は、冒頭から末尾まで全文の引用をしているのである。そして、それに続いては、次のようにある。

と讀終り、此浦島太郎といふ男は、隣國の生れだナ。近所に居ながら今まで履歴を知らなんだが、扱々羨しい人だ。どうか己も一度は龍宮といふ所へ往て見たいものだが、何にしても海の中にある都だから始末がわるい。先生は海獵師で海上に明るいが、己は山獵師だから櫓櫓の扱ひと來たら、蠅が燈心で、手張る合浦外ヶ濱だ。其替り山に掛たら、兎の曲飛、栗鼠の枝渡り、どんな事でもお茶の子だが、山にも龍宮があればい、がナア、ヨツトあるく蓬萊山といふ所がある。此所にしやう。夫にしても西か東か方角がさつぱり分らね。何にしる家元

の浦島明神へ参詣して、夢中の神託といふ特別なお告でも授りたいものだ、虫のい、目算を立て、其夜は早く枕に着き、翌朝未明に起出で、商賣道具の鍔砲を肩にかけ、丹後の國の浦島神社を志してぞ立出ける。

『蓬萊嘶』は、自序と十段に分かれる展開で構成されている。それぞれの段は文中に道標の図示で「従是／篠やま」（第一段）として記されており、篠山・水の江・仏が原・寢覚の里・傾城が窪・富の森・緑の林・汨川・中道・出世の関と続き、道中物の趣として展開されている。丹波篠山の獵師・次郎作は、御伽草子「浦島太郎」を読み、丹後の浦島神社に詣で祈願する。そして各地を遍歴し最後には金持ちとなり幸せになって暮らす、という山・江・原・里・窪・森・林・川・道・関、山あり谷ありの出世嘶である。第一段も含めて具体的展開と粗筋は以下の通りである。ゴチックで示した語は展開のポイントとなる語句である。

第一段・これより篠山

「従是／篠やま」

（一丁表～六丁裏）

丹波の篠山にすむ獵師の次郎作は、ある日借りてきた御伽草子の「浦島太郎」を読んで、自分は山獵師だから龍宮は苦手だが、蓬萊山には行ってみたいと思い、手掛かりを求め丹後の浦島明神に詣でる。

第二段・これより水の江

「従是／水の江」

（六丁裏～十丁裏）

次郎作は浦島明神に、蓬萊の道案内に鶴を貸してほしい、返事は夢告げでと、頼む。そして、夕方までに獵をして、明神への膳にと山へ行く。真鶴を狙った熊を追って銅像の阿弥陀如来に登ると、像の胸の辺りが窓になって開く。縄を取り出して台座に引っかけ、真つ暗な銅像の中へ入るが、命綱が切れて落ちる。

第三段・これより仏が原

「従是／佛がはら」

（十丁裏～十六丁裏）

不老不死の千年飴（寿命糖）を売る商人が、折鶴に飴を一と舐めさせると、鶴は蓬萊山目指して飛んでいった。それ

を見た次郎作は、飴屋に蓬萊の場所を聞く。飴屋は次郎作をわが家に案内し、浦島太郎の本当の話をして、忘れなければ、必ず蓬萊へ行けるからと、折鶴を渡し、それを使って飴を売って元手を作り、稼いで蓬萊へ行くようにという。飴売りは浦島の指図で来た鶴であった。鶴は次郎作を乗せて飛ぶが、次郎作は目が廻って地上に落ちてしまう。

第四段・これより寢覺の里

「従是／寢覺の里」

(十六丁裏～二十一丁表)

人に揺り起こされた次郎作は、落ちて自分の頭が欠けていないかと心配する。しかし、気がつくと浦島明神の神前に寝ていた。これまでのことは**夢告げ**であった。明神から浦島の苗字と、蓬萊へ来て歓楽に耽ることを許される文を受け取る。鉄砲を明神に奉納し、獵師を捨てて、飴売りから財をなすが、**半粋長兵衛**という男から無間の鐘のことを話され、さらに**廊**に誘われ、丹頂鶴の扮装で商売に出かけることにする。

第五段・これより傾城が窪

「従是／傾城が窪」

(二十一丁表～廿六丁表)

廊で次郎作が来るのを待つて毎日飴を買い切る大尽がいた。次郎作は、それを馬鹿物と批判する。茶屋女から、**玉藻**という花魁が自ら金を出しても次郎作と会いたいといっているといわれ、玉藻と会う。次郎作は騙されているとも知らず、女のとこに毎日通う。結局駆け落ちと称して、家に連れていかれ、待つていた男に持ち金の**三百十両**をそれまでの勘定として残らず取られて、追い出される。

第六段・これより富の森

「従是／富の森」

(廿六丁裏～三十一丁表)

飴を売っている次郎作は、**富の森八幡宮**の五千七百二十九番の**富札**を半値で飴と交換した。五千は飴の効能の口上、七百は浦島の歳、二十九番は熊の「仁獣熊」からの見得けんとくという。その通り一番富の**千両**が当たり、あわてた次郎作は宿で草鞋履きのまま二階にあがってしまった。

第七段・これより緑の林

「従是／緑の林」

(三十一丁表～三十八丁表)

手数料を差引いた七百両の金を手に入れたが、宿の主人たちに約束の分け前を遣るのが惜しくなった次郎作は、これ

を元手にとこっそり都へ出かける。夜になって峠を越えなければならぬ道中に、座頭と一緒にあった。峠で座頭は追剥（坊主六）となり、次郎作を襦袢ばかりにして、金も着物もすべて持ち去った。

第八段・これより泪川

「従是／泪川」

（三十八丁表～四十二丁裏）

道行夢の世迷言

次郎作は、死のうと考え、襦袢一枚で川を探して麓まで下りた。川の浅瀬に居たところ、土左衛門の玄吉が来て理由を尋ねるので、訳を話す。今更道具もなく飴屋もできないので、死ぬというと、ヒータラノビールは護膜（ごまく）のことで、都にあると教えられ、死ぬことをやめ、ついでいくことにする。

第九段・これより恋の中道

「従是／戀の中道」

（四十二丁裏～四十六丁裏）

都の石部屋金左衛門という質両替商に奉公した次郎作は、丁稚の双松と店の娘おとねの仲を知り、双松に意見しておとねへの辞色願を書かせた。渡すことを頼まれて、開帳参りの折に娘に渡そうとするが、娘は自分への恋文と誤解して、受取を拒否して騒ぎとなる。通り合わせた玄吉が間に入って次郎作を預かる。次郎作から訳を聞いて玄吉は事の次第を理解し、再勤咄を勧めようとするが、次郎作は娘の忠義にならないからと断り、玄吉の家の居候となる。

第十段・これより出世の関

「従是／出世の関」

（四十六丁裏～五十一丁表）

都で戦が始まり、玄吉は人入れ商売を始めた。次郎作も働き、敵の鉄砲を奪って戦ったことから、褒美をもらう。東国での戦にも参加し、鉄砲直しの仕事を始め、段々と金持ちになる。妻を娶り今は五本の指に入る持丸となった次郎作は、浦島明神への感謝の気持ちをおぼれない。隠居して南湖に新たに居を構えた次郎作は、その祝宴の席で富士の山を見て、これこそ蓬萊山だと気がつく。

以上のことから、この物語は御伽草子「浦島太郎」を振り出しにした遍歴物語であり、今日的表現でいえば、次郎作

の蓬萊を目指す、あるいは探すためのロードムービーであるといえる。

もう一つの蓬萊噺

浦島太郎には、もう一つの話がある。御伽草子の一作品というだけではなかった。明治初年までに別の顔を持っていたのである。単なる龍宮という異境だけでなく、次々と異国を旅する物語である。いわば遍歴体小説としての側面である。遍歴体小説というといギリスの作家ジョナサン・スウィフトの『ガリバー旅行記』（一七二六年）が著名である。船医であるガリバーが小人国・巨人国・飛行島・馬の国という異境を巡る物語である。

日本においても『御曹子島渡』^{注10}という類似の物語があり、成立は室町後期まで遡ると考えられるので、こちらの方が早いかもしれない。御曹子と呼ばれる源義経が喜見城にある「大日の法」を手に入れるために馬人島や女護ヶ島など島々をめぐるゆく話である。この話は浦島と同じく「御伽文庫」と呼ばれる二十三編の叢書の中に収められて江戸後期まで刊行されていく。

こうした遍歴の物語の流れの中で、新たに江戸時代の中頃には、風来山人『風流志道軒伝』宝暦十三年（一七六三）が刊行されている。平賀源内の作である。そこでは大人国・小人国・女護島が登場している。さらに十一年後の安永三年（一七七四）には和莊兵衛・遊谷子『異国奇談和莊兵衛』が刊行される。そして、四十六年後に登場するのが滝沢馬琴『夢想兵衛胡蝶物語』で文化七年（一八一〇）のことである。ここでは、前編に少年国（水子島・不教国・孝行島）・色慾国・強欲国・貪欲国が登場し、後編には食言郷・煩惱郷・哀傷郷・歓楽郷が登場する。作者の主張は、老荘思想の批判であり、儒教による勧善懲惡こそが大事であると言説く。

なお、この作品は一世を風靡し、広く読者諸子に迎えられたようで、明治になっても木版から版を金属に替えてまで印

刷されたようである。手許には明治十六年銅版袖珍十卷本（大坂・岡田茂兵衛／東京・木村文三郎）、及び同年春陽堂刊行の十八年第三印行版があり、明治四十四年東京百華書房刊行の十銭文庫（前・後編）になって活版刊行されたものもある。袖珍本の厚紙の帙には大きな魚籠に右腕を載せて眠っている夢想兵衛と亀に乗った浦島仙人の絵が木版色刷りで貼り付けられている。また、春陽堂版では第九図として小船に寝入っている夢想兵衛の脇に亀に乗った浦島仙人が描かれている。主人公の夢想兵衛は、神奈川の浦島塚・西蓮寺の近くに住む漁師であった。ゆえに浦島太郎が仙人となって登場してきているのである。浦島塚とは龍宮から帰郷した浦島太郎が、乙姫から贈られた観音像と玉手箱とを持って、両親の故郷である三浦半島へと向かう途中、ここ神奈川で息絶えたという伝説を踏まえて建立されたものである。この伝説と浦島寺の詳細については別に触れたものがあるので、拙論を参照されたい。^{注二}

明治の夢想兵衛たち

ところで、こうした島巡りの物語は馬琴以降も続き、明治になっても新作が刊行されていく。明治十三年（一八八〇）風頼子『黒貝夢物語』は正しくは「龍宮奇談／黒貝夢物語／第老編」とされる。黒貝は国会の謂いで、議會政治を望むための物語であった。同年、服部撫松「第二世夢想兵衛胡蝶物語」も『東京新誌』に連載（二一〇号～二四〇号）されている。ここでは、少年国（水子嶋・不教島・才撥島・孝行島）・不孝島・色慾国・色道問答が内容となっている。また、明治二十三年（一八九〇）には『夢想兵衛開明物語』が刊行されている。これは気儘放史・漫評で米嚙笑史・戯編とあるが、刊行の経緯は複雑だったようである。自叙には「明治十九年丙戌冬鳥採筆於農人街假寓」と「米嚙笑史」とあり、奥付には「明治十九年十二月廿三日版權免許」「明治二十年一月発兌 発兌所 寺井書店」とあるのだが、本文冒頭「明治／廿三年」（一行割書）と「夢想兵衛開化物語上巻」とあり末尾には「明治廿三年」も「夢想兵衛開化物語下巻終」とある。どうやら

刊行は遅れたのだろう。編輯人は「東京府平民・石橋中和(当時大坂府下東区農人橋二丁目十二番地寄留)」で、出版人は大阪府平民・寺井與三郎(大坂府下南区順慶町三丁目四十番地寄留)で寺井書店(大坂心斎橋順慶町南)同所兎屋支店とある。この他に服部仁氏は明治以降にも邨川弘三〔注二〕『〔注二〕賽胡蝶記」(明治十一年)、幻華庵主『蝶胡蝶正夢草紙』(明治二十一年)を直接の影響関係はないとされながらも挙げられる。

こうした流れの中で注目するべきは『黒貝物語』であろう。作者でもあり主人公でもある風頼子がフランス革命やアメリカ独立戦争の本を読んでいると新旧交替の虚しさや慷慨の気持ちが起こって鬱々としていく。そこで心安らぐ本を探すと浦島太郎の古写本を見出す。読んでいるうちに自分も亀の背に乗って龍宮に行けないだろうかと思う。気が付くと浜辺で、そこへ浦島太郎が現れるのである。

こう記せば『胡蝶物語』を下敷きとしていることはすぐにわかり、また『蓬萊噺』にも類似していることも窺える。横田順彌氏は風来山人や馬琴の異国漫遊記の流れを引いた作品でありながら「江戸時代の戯作類と明確に一線を画するのは、風刺画徹底して政治・社会に向けられ、国会をもじった黒貝というタイトルや、主人公の訪ねる夢想国が、そっくりそのまま、当時の日本社会をコピーしたものである、などの点による」と記している。〔注三〕

つまり、『黒貝物語』は『胡蝶物語』の系譜を受け継ぐ物語でありながら、徹底的な政治小説でもあったのである。

もう一つの旅物語 まとめにかえて

根岸亮に『草鞋記程』という共同執筆の紀行文が残されている。明治二十五年に私家版として刊行されたものである。その年の十一月に九名の文人たちが妙義山へと旅をした折の記録であった。その作品を詳細に分析したに出口智之氏は「旅先の風景や事物、およびそれにまつわる感興よりも、旅を舞台にした彼らの遊びの様態を主要な題材としており、そ

の意味では紀行文より道中記と称する方が適切かもしれない」と述べている。^{注一四}

こうした旅の趣向は、江戸後期から読者の興味を誘った旅物語を想起させる。十返舎一九『東海道中膝栗毛』享和二年（一八〇二）ほか一連の道中記のことである。これはお伊勢参りを目的とする旅であるが、弥次郎兵衛と喜多八の道中のドタバタが読者の笑いを誘う。明治になってもその趣向は生かされている。仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』明治三年（一八七〇）である。三代目の弥次郎兵衛と北八はロンドンの万国博覧会を目指して船で出かけるのである。

旅を題材とする物語には大きく二つに分けられる。確たる目的のある旅とどこに行く当てのない旅である。前者は仮にその所在を知らなくても、通りがかりの人々に尋ねながら目的地を目指して進めばよい。近年ならカーナビ付きの車であれば、初めてで道を知らなくても、情報に誤りがない限り、行きつくことができる旅である。

しかし、『蓬萊嶺』は最初から蓬萊山を目指す旅であっても、それがどこにあるかもわからない当てのない流浪の旅であった。そこが他の遍歴小説などと大きく異なる物語であった。

得知が描こうとしたのは、馬琴に想を借りながらも、夢想兵衛が巡った非現実の国々のことではなく、『胡蝶物語』の漁師そのもの、日常社会に住む一人の庶民が旅とともに成長していく様を描こうとしたのであろう。

結論からいえば、青い鳥を探す子供の旅のように、気が付けば蓬萊山は、富士として目の前にあったのだというのである。明治の島巡りの多くの物語は国会と民主主義を標榜するものであった。しかし、得知の描いたものは、そういった政治的理想世界ではなく、日常生活の中にあるささやかな蓬萊山探求であったのである。

注

〇一 近代文学研究叢書・第十四卷（昭和女子大学近代文学研究室・昭34）においても、得知のことを「江戸通人の残照」とし「そ

の業績も近代文学にかかわるものは乏しい、また劇評についても「見巧者の域を出ず」と厳しく評している(一〇頁)。

〇二 拙著『浦島伝説の研究』(おうふう・二〇〇一年)第七章・第一節「二人の浦島次郎」参照。

〇三 近代文学研究叢書及び『日本近代文学大事典』第二巻(昭五二)の「幸堂得知」(二六―一七頁)による。但し、明治書院『現代日本文学大事典(増訂縮刷版)』(千谷道雄)では「万延八―大正二・三・二二」としている。

〇四 近代文学研究叢書では「青森支店長のとくに部下の行金使い込みの責任をとり退職した」(二〇頁)とする。また帰京して下谷区六阿彌陀横町に「呉服を商ったが失敗したので文筆で立つよう決心した」とも記す。

〇五 『日本近代文学大事典』第六巻・叢書・文学全集・合著集総覧、一二頁。

〇六 高橋寿美子「根岸等と江戸風文学の隆盛」、法政大学大学院紀要・六〇・二〇〇八年(三四九頁)

〇七 所謂御伽草子「浦島太郎」の諸本には大きく四系統的分かれるが、「御伽文庫」本はその流布本系に当たる。拙著『浦島伝説の研究』第三章「所謂御伽草子「浦島太郎」参照。また叢書としての「御伽文庫」の刊行は享保頃とされているが、その本文は寛文頃にまで遡ると考えられている。『お伽草子事典』(東京堂出版・二〇〇二年)「洪川版」五四頁・参照。

〇八 拙著『浦島伝説の研究』第四章「浦島乗亀譚の成立」参照。

〇九 この粗筋部分は前述の「二人の浦島次郎」に掲載のものを改訂して再掲した。

一〇 『お伽草子事典』東京堂出版・「御曹子島渡り」一九三頁。

一一 拙著『浦島伝説の研究』第五章「浦島寺の成立と展開」参照。

一二 『夢想兵衛胡蝶物語』解題・読本善本叢刊・和泉書院・一九七七年。

一三 『日本SFこてん古典』I・三五九頁・早川書房・一九八〇年。

一四 出口智之「根岸党の旅と文学——『草鞋紀程』の成立考証から——」『笑いと創造』第六集・所収・勉誠出版・平成二二年・四二九頁。